
水辺の異形

— スー・アナス、ジャルマウズ、アルバストゥ、シュリクンについて

坂井弘紀

— 要旨

中央ユーラシアには、川や湖などに棲み、人間に悪事を働く超自然的存在がいる。「水の世界」は人間の世界とは異なる「異界」、もしくは「境界」を意味し、スー・アナスやジャルマウズ、アルバストゥといった水辺の存在には、女性性や母性の特徴が強くみられる。母性に関連して、ジャルマウズやアルバストゥは、出産など人間の生にまつわる要素が強く、彼女らが本来は生命にまつわる母神的存在であったという仮説が浮かぶ。人間を苦しめ、命を奪う存在でありながら、反対に人間に善や利をもたらす存在でもあることは、彼女たちが生と死という対立的な両義性をもつことを示す。ジャルマウズとアルバストゥは形状や役割からみると、ロシアのバーバ・ヤガーと同類であり、また、シュルガンとロシアのシュリクンも水に関わるといふ点やその名称の類似性から深いつながりがあることが推定される。ユーラシア中央部には、言語や「民族」の枠組みを超えた文化的共生があったのである。

はじめに

中央ユーラシアのテュルク系民族には、さまざまな超自然的キャラクターにまつわる伝承がある。それらの魅力的なキャラクターは、テュルク諸民族の歴史や文化と密接につながり、習俗や信仰、日常の暮らしと深い関わりをもっていた。その中でも、川や湖といった「水辺」と大きく関連するキャラクターの存在がとくに目を引く。本稿では、スー・アナス、ジャルマウズ、アルバストゥ、シュルガン／シュリクンというユーラシアにおける代表的な「水辺の異形」を取り上げて、伝承世界の中に生きる超自然的存在の特徴について論じる。

1 スー・アナスと「異界」

テュルクには、家や森、川など、さまざまな所にそれぞれの「主・精・精霊」がいるという考えがある。たとえば、シベリア・タタールでは、川にはスー・アナス（「水の母」の意）

という「川の主」がいると信じられ、川にボートを浮かべるときには、スー・アナスをおとなしくするため、コインを彼女に投げる。また、彼女が驚いて怒ると、波をたてるという⁽¹⁾。「カザン・タタールのプーシキン」ともいわれるガブドゥッラ・トゥカイ（1886-1913）は、『スー・アナス』という詩の小品を著した（文末【資料A】参照）⁽²⁾。タタールに口伝えられてきたフォークロアに基づいたこの作品は、シンプルなストーリーでありながら、独特の雰囲気をもつ。

水遊びをしていた少年がスー・アナスと呼ばれる水の精を見つけ、その金の櫛を盗む。スー・アナスは追いかけてくるが、必死に逃げてどうにか帰宅する。夜になり、櫛を取り戻そうと、少年の家にスー・アナスがやってくる。その櫛を返すと、スー・アナスは去っていく。

この話のポイントは、少年が川というスー・アナスの領域を侵し、さらに彼女の持ち物を自分の家に持ち帰ったこと、今度は逆にスー・アナスが少年の家にまで現れ、自分の櫛を取り戻すという点である。人間が精霊の空間を侵し、精霊が人間の空間に現れる。金の櫛がその媒介となるのだが、この物語は二つの空間の厳然たる区別、双方の棲み分けを明確に示すものである。地上世界から地下世界に行き、魔物と戦う英雄物語が、ユーラシアには数多く伝わるが、地上世界にも魔物はおり、互いに侵してはならない空間があるのだ。トゥカイが靈感を受けたスー・アナスは、タタールではポピュラーな魔物であり、すぐ近くにいる「水辺の異形」と言えるだろう。

超自然的な存在に追いかけられ、魔力をもつアイテムを手放すことで逃れられるという話は、世界各地に珍しくない。たとえば、グリムの採録した「水の魔女 Die Wassermixe」（KHM79）では、泉の中に落ちた兄と妹が魔女に捕らえられ、働かされるが、やがて逃げ出す。追いかけてくる魔女に、刷毛・櫛・鏡を投げると、それぞれ大きな山となり、兄妹は遠くへ逃げることができるといふ筋書きである⁽³⁾。このような話は、口承文芸学では「呪的逃走」と整理される⁽⁴⁾。日本では「三枚のお札」としてよく知られる「呪的逃走」は、古いものとしては日本神話に、黄泉の国を訪ね、シコメから逃れたイザナキの話があり、このようなストーリーは「最古の昔話」に属するとの指摘もある⁽⁵⁾。「呪的逃走」をテーマとした同様の話は、中央アジアにも伝わる。その一例として、カザフの『ジャルマウズ』という伝承をあげよう。

3人の娘が森の中にある妖婆ジャルマウズ・ケンピルの家で彼女に食べられそうになり、逃げ出す。追いかけてくるジャルマウズに長女が櫛を投げると、大きな森の中になるが、ジャルマウズ・ケンピルは自分の一本の歯を斧に変え、また別の歯を鋏にして、森を抜ける。次に二番目の娘が針を投げると、それは高い山になるが、ジャルマウズは、そこをどうにか越える。末娘が鏡を投げると、大きな湖になり、その大きな

湖を見て、ジャルマウズは「おまえたちはどうやって渡ったのだい？」と尋ねる。娘たちは答えた。「私たちは首に石を結んで渡ったのよ」。老婆は石を結んで湖に入ると、そのまま沈んでしまった。娘たちは自分の家に帰った。⁽⁶⁾

魔女のいる異界から主人公が逃走することや、櫛が重要なアイテムであるなど、カザン・タタールの「スー・アナス」とも類似する「呪的逃走」の典型話である。姉妹が投げる障害物が櫛・針・鏡という女性的なアイテムであることは、「呪的逃走」の多くで女性の属性をもつ老婆や魔女が追いかけてくると大きな関係があるろう。

「呪的逃走」はその「境界」で終わりを告げるとの指摘⁽⁷⁾のとおり、ジャルマウズが沈む、鏡が変化した大きな湖は異界との境界を意味している。この伝承でジャルマウズの住処は、水辺ではなく、森であるが、「川の無いところでさえも、呪術的境界という感覚が時にまったく明瞭に表現されている」⁽⁸⁾ことを考慮すると、ジャルマウズは「スー・アナス」と同類の「異界の異形」といえよう。日本に伝わる「三枚のお札」についても、「三枚のお札」の場合は、小僧がようやく逃げ込んだ「寺」が現世と彼岸の境界と言えるかも知れない。ロシアの昔話研究者ウラジーミル・プロップ (1895-1970) は、逃走と追跡の基本的な種類は、死者の国から生者の国への帰還において作られていると述べる⁽⁹⁾。「呪的逃走の物語は、彼岸への畏怖と此岸への希求が接し合う「境界」を示唆している」⁽¹⁰⁾のである。またプロップは、フィンランドの民族学者アールネ (1867-1925) の、水・川が最後の障害物であることが多いとの指摘に触れながら、この川を生者の国と死者の国を隔てる川と比較したことを踏まえて、川は最後の障害物として特別の意味をもっており、追跡者を阻止するのはまさに境界としての水であると述べる⁽¹¹⁾。水に落ちれば、命を落とすこともある。水は生と死を分かち命の「境界」なのである。

さて、水が人間の世界と異世界とを分かち境界であると同時に、その先には異世界、たとえば、地下世界が広がっているとすると世界像は珍しくない。『地下世界の鷲』(トルコ)や『カムル・バトゥル』(ノガイ)、『トゥグルク・バトゥル』(ウイグル)などでは、主人公は地上世界から井戸を下り、地下世界に到達する⁽¹²⁾。地下に通じる井戸もまた水の空間である。なお、ウイグルの『トゥグルク・バトゥル』では、母と娘が川の向こうへ薪を取りに行った際、娘がクマにさらわれ、このクマと娘との間に主人公トゥグルク・バトゥル(毛むくじゃらの勇者)が生まれる。彼は、父であるクマを殺し、母とともに川を越えて村へ戻る。主人公が超人的な力をもつのは、川の向こう側の「異界」で生まれたためであるというのも示唆的である。

水辺の向こうには「異界」があるという世界像とは別に、地下世界から見ても、川はやはり境界であるとする考え方もある。シベリア・タタールの英雄譚『イールトシュレク』の中で、地下世界の皇帝は言う。「この川にいるペリによって生きていくことが困難になった。やつらが我々の町にやってきて、われらを滅ぼそうとしたからだ」⁽¹³⁾。ペリとは女性の特性をもつことが多い「妖精」で、スー・アナスと同様の超自然的存在である。地下世

界の皇帝のセリフからは、川の中のペリは地下世界の住民や地下世界側の存在ではなく、彼らと対立する存在であり、地下世界とも異質の領域の存在であるということがわかる。つまり、ここで川は、地上世界と対立する地下世界そのものではなく、その二つの世界の間にはさまれた「境界」としての領域を意味している。水のペリ（スー・ペリス）は次にイールトシュレクと妻を苦しめようとし、川に引きずり込む。イールトシュレクは西に、妻は東に流された。その後苦難の末に、イールトシュレクは妻と再会できるが、ここでは、水のペリが地下界においても、地上界においても危害を与える存在であると描かれていることに注意したい。二つの世界の間には流れる水／川の「境界性」が明瞭に読み取れるからである。

2 ジャルマウズとバーバ・ヤガー

前章で見たように「呪的逃走」の伝承に現れる妖婆ジャルマウズは、「異界」とこの世界とを行き来する存在であった。ここでは、ジャルマウズについてさらに詳しく見ていこう。ジャルマウズは中央ユーラシア・テュルクのフォークロアにおいて、さまざまな伝承や物語に登場する超自然的キャラクターである。ジャルマウズは人気のない山や平原に住む、醜怪な老婆の姿のほか、7つの頭をもつこともあり、彼女は、道に迷った旅人を食べてしまう⁽¹⁴⁾。蛇の姿に化けることもあるが、注目すべきは、肺臓の姿に変化する、水面を漂う、人を食べる、子どもをさらうという点である⁽¹⁵⁾。

クルグズ（キルギス）の英雄叙事詩『エル・トシュテュク』にもジャルマウズ（クルグズ語ではジェルモグス。以下、ジャルマウズ）は現れる。彼女が主人公の父エレマンを襲う場面は次のように描かれる。

大鍋のような黒い肺臓が川上から流れてきた。エレマンは川に入り、水から肺臓を取り上げた。ウクルク（縄付き棒）を突き刺した。肺臓を引き裂いた。さらに肺臓を突き刺した。肺臓は棒をつかみ取り、肺臓はその棒を引っ張った。エレマンは仰向けに倒れた。肺臓はジェルモグスに変身した。エレマンに跨って、きつくぎゅうぎゅう押し付けた。魂が出てきそうになったまま、エレマンは地面に横たわっていた。……「私の息子エル・トシュテュクをあげよう！」……ジェルモグスは「よろしい。いいでしょう」とエレマンを放した。⁽¹⁶⁾

この場面で注目されるのは、魔女ジャルマウズが肺臓の形状に変身していたこと、人間を魂が出そうなほど圧迫すること、息子を手に入れようとすることである。中央アジア各地には、ジャルマウズが肺臓になって、川辺で人々に襲い掛かるといふ伝承がある。「肺臓」に化けるといふことは、いささか奇妙ではあるが、おそらく、呼吸器官を象徴的に表すことで、川の水が、人を溺れさせ、命を奪う存在であることや、生と死を分かち「境

界」であることを強調しているのである。なお、ジャルマウズが肺臓になることについては、「水（川）はあの世で、そこにある肺臓は死んだ人の魂である。ジャルマウズ・ケンピルは死者の皇帝の番人なのである」⁽¹⁷⁾ という概念を示しているとの指摘もある。また、肺臓という形のジャルマウズ・ケンピルは死んだ魂の平安を守り、そこに何か危険が近づけば、本来の姿になり、攻撃者を罰するという⁽¹⁸⁾。

『エル・トシュテュク』におけるジャルマウズは、エレマンを襲ったあと、その息子トシュテュクの魂を奪おうとする。だが、彼女はトシュテュクと戦って敗れ、魂を手に入れることに失敗すると、彼を地下世界へと誘う。このように、勇者が地下世界に行くきっかけをジャルマウズはつくるのである。この働きこそ、まさに彼女の「異界」との仲介者としての役割なのである。

ジャルマウズはまた、人間が近付くと、七つ頭の老婆に化けて、その人を捕まえ、息子を渡すよう強いる⁽¹⁹⁾。『エル・トシュテュク』においても、ジャルマウズはトシュテュクの父に息子を譲るよう迫った。ここにはジャルマウズの「子さらい」の顔がある。それは、実の親からわが子を奪おうとする恐ろしいものではあるが、同時に父親にそれを受け入れるか拒絶するかを試すものでもあるといえよう。結局、父は息子を裏切り、ジャルマウズに彼を渡すことを約束する。彼女は父に息子を救うチャンスを与え、親のわが子への愛の大きさを測ったともいえる。ジャルマウズは母性庇護の信仰に由来するとの見解があるが、この場面がその信仰の残滓と見なすことは、あながち牽強付会ではないだろう。「息子をジャルマウズに渡すこと」や「ジャルマウズから逃げること」というモチーフは、原始社会のイニシエーションの伝統の概念であり、古代の母系的社会のリーダーであった女シャマンが成年に達した娘たちを試練に耐えさせる習慣がジャルマウズの像に残されているとの考えがある⁽²⁰⁾。彼女が父から息子トシュテュクを要求する理由は、子どもから勇士になることを求め、成人になるという習慣を実行させることにあるという⁽²¹⁾（文末【資料B】参照）。

ジャルマウズは、『エル・トシュテュク』のシベリア・タタール版である『イールトシュレク』にも「ヤルマウズ」の名称で登場する。主人公は赤毛馬に乗り、いなくなった妻コナルスルを追い続け、ある山のふもとでヤルマウズと出会った。妻をさらったのはヤルマウズであった。彼はヤルマウズを殺して、妻を連れ返した⁽²²⁾。ここで、ヤルマウズが女性を「さらう」という点は、上述の女シャマンによる娘たちの試練の習慣の名残であるという説と連関するかもしれない。いずれにしても、主人公の勇者やその妻をさらうジャルマウズは、アメリカの神話研究者ジョセフ・キャンベルのいう英雄物語における「イニシエーション」に欠かせない存在である。中央アジアの英雄叙事詩には、ムスタン（マスタン）・ケンピルという妖婆が現れるが、彼女もこうした役割を担い、ジャルマウズの同類とみなされる⁽²³⁾。

ジャルマウズにはまた、人間を食べるという面もある（文末【資料B】参照）。このキャラクターの名称の語源は、おそらく現在のカザフ語やクルグズ語で「貪り食う・がつがつ

食べる」を意味する「ジャルマ жалма-」と「口」という意味の「アウズ ауыз」に求めることができるだろう。

さて、ジャルマウズは、ロシアのバーバ・ヤガー Баба-Яга に相当するという⁽²⁴⁾。バーバ・ヤガーは、東スラヴの魔法昔話に登場する森の妖婆で、「盲目で痩せこけ、骨だけの一本足で、乳房の垂れ下がった白髪の醜い姿」⁽²⁵⁾である。バーバ・ヤガーは必ずしも水の属性を伴わないが、英雄譚などの伝承では、ジャルマウズとほぼ同様の役割を果たす。プロップによれば、バーバ・ヤガーには、物語の主人公に贈り物をする「贈与者」、子どもをさらって食べようとする「誘拐者」、主人公の背中を剥ごうとする「好戦者」の3つの顔があり、死者の世界と何らかの関係をもつ⁽²⁶⁾。その一方で、ヤガーは母性のすべての特徴をもっており、「そこに非常に古い社会関係の痕跡を認めなくてはならない」⁽²⁷⁾。プロップの考えでは、「母親は統治者であったが、母系制の衰退とともに、女性は権力を失い、母性だけが社会的機能のひとつとして残った」⁽²⁸⁾。またジャルマウズには、女シャマン・女魔法使いや父祖伝来の火の所有者、「死の国」の領主・見張りといった本来有していた機能が示されるとの指摘もある⁽²⁹⁾。ジャルマウズは、道に迷った旅人を食べてしまうが、同時に、主人公を助けたり、有益な助言をしたり、正しい道を教えたりすることもある⁽³⁰⁾。こうしたジャルマウズの性格が、プロップが指摘したバーバ・ヤガーの母性的機能になぞらえられることも⁽³¹⁾、ジャルマウズがバーバ・ヤガーに相当するとする考えを補強するものである。バーバ・ヤガーは、さらってきた幼児を自分の小屋のかまどで焼いて食べる。この小屋は、儀礼的に死と再生を経験するための通過儀礼の小屋になぞらえられ、バーバ・ヤガーをユーラシアの巫女（シャマン）と比べる考えもある⁽³²⁾。ジャルマウズやバーバ・ヤガーのこうした特徴は、ユーラシアの精神文化を考える上で重要なヒントを与えてくれるものである。

テュルク諸民族分布図



3 アルバストゥの母性

ジャルマウズとよく似た超自然的存在にアルバストゥがいる。この異形は、アルバストゥ Албасты (カザン・タタール、クリミア・タタール、シベリア・タタール、バシュコルト、カザフ) やアルバス Албаслы (カラカルパク、ノガイ、クムク)、アルマストゥ Алмасты (バルカル、カラチャイ)、アルバルストゥ Албарсты (クルグズ)、アルバッス Албассы (トルクメン)、アルプス Албыс (トゥバ、アルタイ)、アバーフィ〈アバースとも〉 Абааһы (サハ) など、テュルク諸語では大同小異で呼ばれるが、ここでは、一般に事典などに立項されることの多いアルバストゥに表記を統一しよう。

アルバストゥは「水」「出産」「呼吸」といった要素に深くかかわる。アルバストゥは川や水源の近くを住处とし、ふつう岸辺で髪を抜げている姿が見られる⁽³³⁾。その姿は第1章で見たスー・アナスと重なり合う。女性が失神すると、それはアルバストゥが苦しめているからだといわれ、女性との関わりが深い特性をもつ。アルバストゥ自身、乱れた長い髪で、長い乳房を肩にかけた女性の姿をしていると考えられている(文末【資料C-1,D】参照)。アルバストゥは病や悪夢をもたらすが、とくに妊婦と新生児に害を及ぼす。出産の際に害を与える精霊で、カザフでは「ジェズトゥルナク」(銅の爪)とも呼ばれる⁽³⁴⁾。トルコやアゼルバイジャン、クルグズ、カザフなどの神話では、産婦の肺臓や肝臓、心臓を盗み、それをもって水中へ逃げる。アルバストゥがそれらを水に入れると、持ち主の女性は死ぬ。カザン・タタールでは、アルバストゥは自分の生贄の血を飲むという。馬を愛するという描写も広まる。夜ごと馬を乗り回し、たてがみを編む⁽³⁵⁾。アルタイでは、地下世界の悪をもたらす精霊で、地下界の帝王エルリクに仕えるという⁽³⁶⁾。

長く大きな乳房の醜悪な女性とのイメージが一般的なアルバストゥであるが、彼女はキツネなどの動物や無生物の物体に変身することができると考えられている。カザン・タタールでは、荷車や干し草の山、エゾマツの姿になると伝わる。アゼルバイジャンではアルバストゥが鳥の足をしているとも考えられ、また、カザフの神話では、裏返った足の裏、あるいは蹄のついた足をしているとされることもある⁽³⁷⁾。トゥバの神話によれば、額にある一つ目で石あるいは赤銅からできた鼻をもち、背中に皮膚はなく中身が見えている(この点はカザン・タタールにも信じられる)。シベリア・タタールでは、アルバストゥは鋭い爪をもつとされる。クルグズとカザフでは、「黄アルバストゥ」や「悪臭アルバストゥ」、もっとも有害で恐れられる「黒アルバストゥ」などと細分化されることもある⁽³⁸⁾。アルバストゥは特別な鞭によって撃退することが可能で、またフクロウやワシを恐れるため、クルグズ、カザフ、ウズベクなどでは、護符としてその羽や足のお守りが利用される⁽³⁹⁾(文末【資料C-1,3,4】参照)。ノガイの伝承では、アルバルストゥは短刀の鞘を最も恐れる⁽⁴⁰⁾。

北カフカース地方のクムクの神話では、アルバストゥには精霊「鉄の胸」という夫がおり、カザフでは、森の精ソレリ(シュラレ)の夫がいると伝わるが、アルバストゥは人間

と性的関係に入ることがある。たとえば、トゥバの神話では、アルバストゥは狩人たちと同棲し、彼らに獲物をもたらしたり、自分の乳を飲ませたり、あばら骨から取った自分の肉を食べさせたりする。アルタイには、アルムイス（アルバストゥ）が女の姿をして人間の男と暮らし、自分の肉や毛髪、乳をごちそうに変えて食べさせるとの伝承がある⁽⁴¹⁾。アルバストゥが人間に利益をもたらすという一面は、トルクメンとウズベクの信仰にもみられ、アルバストゥは自分の罪のせいで病気になった自分の主を治療しながら、彼を金持ちにするとする⁽⁴²⁾。また、ウズベクの民話「アルバスティ」では、アルバスティ（アルバストゥ）の帽子を盗んだ主人公がそのアルバストゥと友達になり、結局帽子は取り返されるものの、最終的には衣装やお金を手に入れる⁽⁴³⁾。この話におけるアルバストゥは主人公に富をもたらす存在である。

シベリアのサハ（ヤクート）のアーフィー（アバース）にも、さまざまな「顔」があり、人間に病気をもたらす悪霊であったり、天神アイイや種々の精霊イッチと反対の性格をもっていたりする一方で、アイイと並ぶ天界の存在であるとされることがある⁽⁴⁴⁾。アーフィーは、靈魂クトの創造主の配下にあって、人間に子どものクトを与える役割も担うが⁽⁴⁵⁾、善と悪、生と死の両側面の特徴をもつことでは、ジャルマウズやアルバストゥとも共通する。古いシャマンによると、この世界の下にはもう一つ別の人が住む世界があり、そこには27部族のアーフィーが暮らすという⁽⁴⁶⁾。

北カフカースのカラチャイやノガイ、クムクでは、従順にされたアルバストゥはその家のために助力すると信じられる⁽⁴⁷⁾。トルコでは、アルバストゥの衣服に針を十分に突き刺すと、彼女はおとなしくなり、どんな命令にも従うという⁽⁴⁸⁾。アルバストゥを従えた人やシャマンは、産婦からアルバストゥを追い払うことができると考えられた。

また、アルバストゥの毛髪をもっていれば、彼女はその人の言うことを聞く⁽⁴⁹⁾。ノガイの伝承では、コーランにアルバストゥの髪をはさんでおくと、アルバストゥは身動きできない（文末【資料E】参照）。トルクメンやウズベクの間では、毛髪の代わりに、アルバストゥのアイテムである櫛、魔法の書、コインでも同様の効果があるとされる⁽⁵⁰⁾。毛髪がアルバストゥを従わせるアイテムであるということは、テュルクの英雄叙事詩や魔法昔話で、名馬の毛や聖鳥の羽を焼くと、その馬や鳥が出現するという発想に通じるだろう。「馬の毛を焼くことは、シャマンを他界にはこぶべき呪的動物を呼び出すのにひとしい」⁽⁵¹⁾との見解にしたがえば、毛髪でアルバストゥを従わせるということは、他界とこの世界とをつなぐシャマンを呼び出す行為と連関する。櫛は、すでに見てきたように、スー・アナスの金の櫛やジャルマウズに投げて大きな森になった櫛など、魔女のアイテムである。これは、女性の属性の象徴ととらえることがもちろんできるが、同時に、人間に従わせるための毛髪との関係を示してはいないだろうか。スー・アナスが必死になって少年から金の櫛を取り返したのは、櫛が「自分の意志」を操る毛髪を整えるものだからではなからうか。少年が金の櫛を盗んだのは、彼女が川岸で髪を広げていた時である。これらのことは、アルバストゥが乱れた長い髪をしていると伝えられることとおそらく通底するだろう。も

ちろん、広げた長い髪が水流を連想させる働きもある。「水辺の異形」と頭髮の関係は重視されるべきである。

アルバストゥと同様の異形の存在は、テュルク諸民族に留まらない。ロシアには、アルバスタ Албаста やこれに類する呼称 (Лобаста, Лопаста, Лобоста) の女悪魔がスラヴの女悪魔であるルサールカと同様の魔物として信じられた⁽⁵²⁾。これらの名称は、ロシア語の白鳥 лебедь と関連させる意見もあるが、テュルク諸民族のアルバストゥから借用されたと考えられ⁽⁵³⁾、アルバストゥの広がりやロシアにまで及んでいることがわかる。先に見た、ロシアのバーバ・ヤガーも、「掛竿や敷居の下にまで垂れた乳房、掛鉤に巻きついた乳房」⁽⁵⁴⁾をもち、アルバストゥと共通する。アルバストゥの人間の利益になることを行うという一面も、バーバ・ヤガーの「贈与者」の側面と一致し、アルバストゥもジャルマウズと同様にバーバ・ヤガーと同類であるとみなす考えを支える。

テュルク諸民族におけるアルバストゥという言葉の起源については十分に明らかになっていないが、イラン系の「アル al」とテュルク語の「圧迫」と解釈される「バストゥ basty」の結合に由来するとの説が代表的な見解である⁽⁵⁵⁾。現在でも、イランではアールという魔物が知られる。イランのアールは産婦や新生児の心臓や肝臓を奪うと恐れられているため、女性が出産したあと、一日目に部屋の天井と壁の境に線を引いておくと、アールが赤子に憑かないという⁽⁵⁶⁾。「産婦や新生児の心臓や肝臓を奪う」という特徴や名称の類似から、アールはアルバストゥと同類と見なすべきであろう。なお、同系統の名称の魔物は、グルジア (アリ)、アルメニア (アル、アルク)、アゼルバイジャン (ハル) などカフカース地方にも存在し⁽⁵⁷⁾、中央ユーラシアの広い範囲に共有される超自然的存在であるといえよう。

さて、イラン系と考えられるアルはセム語系の古代神のエールに遡れ、またバストゥはロシア語の bes やオセチア語の uas に相当する「精霊」や「神」を意味するインド=ヨーロッパ系の言葉につながるという説もある⁽⁵⁸⁾。このような考えから、アルバストゥの原型はインド=ヨーロッパ系とセム系の人々の接触によって生まれ、現在広がる領域へ拡散したとの仮説も生まれた。魔法の書やコインといったアルバストゥの持ち物は人間を援助する善行の機能の痕跡であり、アルバストゥははじめは善なる女神で、豊穡や家庭の炉、野生動物や狩猟の庇護者であったことを推測させる⁽⁵⁹⁾。この点は、ジャルマウズが母性庇護の信仰と関わっていたとする先述の見解と共通する。その後、新たな神的存在が現れて根付くことにより、アルバストゥが邪悪な低級の精霊の役割に落とされたという考え⁽⁶⁰⁾もジャルマウズの変容と酷似する。

ところで、2017年にクルグズ映画『アルバストゥ』が公開された。タイトルはこの魔物に由来する。流産に悲しむ夫婦が養子を取ると、その子にアルバストゥがとり憑き、一家は怪現象に苦しめられる。現代クルグズを舞台にしたホラー映画であるが、作品に母性というテーマが一貫しており、民間伝承にもとづくこの異形の存在が暗示されている。

4 シュルガンとシュリクン

ウラル地方、バシュコルト（バシキール）の英雄叙事詩『ウラル・バトゥル』には、悪鬼デヴの首領となり、人間の敵になってしまう、主人公の兄シュルガンが登場する。このキャラクターもまた水との関係が深い。「邪悪」なシュルガンは「正義」の勇者ウラルと戦って敗れると、地下に通じる底なしの湖に逃れ、「水の皇帝」となる。その湖はシュルガン湖と呼ばれた。地下世界のシュルガン湖は、まさに「異界」「死の世界」である。シュルガンの存在は水の両義性のうち、負の側面を示す。『ウラル・バトゥル』で、シュルガンは魔法の杖で世界的な大洪水を起こし、人間や動物を溺れさせる。また、シュルガン湖には悪鬼デヴがいるため、その水はどんなことがあっても決して飲まぬよう、ウラルは遺言する⁽⁶¹⁾。ウラルが求めた、永遠の命を与える「命の泉の水」と飲めば死んでしまう「シュルガン湖の水」は、対立的に「生と死」を象徴する⁽⁶²⁾。

ところで、ロシアにも水との関わりが深い魔物がいる。シュリクン шуликуны, шиликуны, шулюкуны, шликунны である⁽⁶³⁾。『ウラル・バトゥル』のシュルガンとよく似た名前のシュリクンの最も大きな特徴は、スヴァートキ [=クリスマス（旧暦12月25日）から洗礼祭（旧暦1月6日）] に水中から現れる点である。背丈は拳ほどで、馬の脚と尖がった頭をもつというこの悪魔は、人々を氷面の穴に誘ったり、川で溺れさせたりする⁽⁶⁴⁾。その姿は『ウラル・バトゥル』の「水の皇帝」シュルガンとイメージ的には必ずしも合致しないが、水で人を苦しめる悪魔であるなど、名称のみならず、役割も重なる。「スヴァートキには洗礼祭の儀式のために人々が川を訪れる。それが終わると、шуликен（筆者注：シュリクン）は皆もう川の中、ヨルダン（筆者注：氷の穴のこと）の中に沈めてしまったから、怖がらなくていいと言われた」、「彼らは川の近くにいるとか、水の中から出てくるとか、聞いたことがあるだけだ」⁽⁶⁵⁾ といった証言が北ロシアで採録されている。シベリアのサハ（ヤクート）のシュリクン／シュリュキュン сюрлюкюн も、水中の世界に暮らす。その体は紅色で眉はない。サハの信仰によれば、運命を予言するのがうまく、すべてを知り、誰が死ぬか、誰が金持ちになるかを言い当てる⁽⁶⁶⁾。運命を予言することについては、「伝統的な占いの空間である「氷の穴／井戸／雪の中／橋／風呂小屋」といった場所がいずれも水と密接な関係を持つことも、「水中」から姿を現すシュリクンを占いに結び付ける一因をなしている」⁽⁶⁷⁾ という指摘が参考になる。

シュリクンの名称と特徴については、サハ（ヤクート）神話からの借用説（パヴロフスキー、シチャーポフ）やそれとは反対のロシアからサハへの伝播説（セロシェフスキ、ヴィノグラードフ）、テュルク語の sülük (=蛭) 起源説（ゼレーニン）、北東アジア起源説（アフメチヤノフ）、フィン・ウゴル語（コミ）起源説（チェレパーノヴァ）⁽⁶⁸⁾、スラヴ祖語の шуй《悪い、不潔な》十二重の接尾辞 ик, ун を語源とする説（トルストイ）⁽⁶⁹⁾ など多くの説がある。これらの中でも、筆者はゼレーニンとアフメチヤノフの説に注目したい。

ゼレーニンは、テュルク系のヴォルガ・タタール人によって、テュルク語の *sülük* (=蛭) という言葉が、同じくヴォルガ流域に住むフィン系の人々の民間伝承に登場するヴォジョと呼ばれる水辺に現れる精霊と結び付けられた結果、*sülük kan* (=蛭の王) は「水辺の小さな精霊たち」と人格化されるに至ったと考えた⁽⁷⁰⁾。また、アフメチヤノフは、「北東アジアの *shuj-lun* (=水中にすむ竜)、*shuj-lun-kuhan* (=水中に住む竜王) という語に注目し、これが西に伝播し、テュルク系バシキール人における *šulgän* (=悪い精霊、水の精) や、フィン・ウゴル語族に属するコミ語の *šulejkin* (=水の精) などと共に、ロシアのシュリクンとなった」⁽⁷¹⁾ と考えた。二つの説は、根拠がそれぞれ異なるが、テュルク系やフィン・ウゴル系と結び付ける点で一致している。バシコルトには、シュルガンの語源は「水 *шу/су*」+「死んだ *улген*」であるという説⁽⁷²⁾ があり、シュリクンの名称と特徴とも重なるが、先行研究では、これまでこの説がシュリクンにあてはめられたことはないようだ。

シュリクンの分布地域 (ムルマンスク、オロネツ、アルハンゲリスク、ヴォログダ、ペルミ、トボリスク、ヤクーツク) の多くがロシア人とテュルク系諸民族が接する地域であることから、テュルク系民族からシュリクン系の名称を受け継いだという仮説が立てられており、シュルガンとシュリクンは互いに深い関係がありそうである⁽⁷³⁾。

スラヴのフォークロアや伝統儀礼においては、「水中」=「死の世界」「あの世」「異界」という図式は珍しいものではなく、人間の力がまったく及ばない未知の空間として現れることがほとんどで、「水中」は帰還の可能性の無い「死の空間」として認識されていること⁽⁷⁴⁾ も「完全な異界」である、シュルガンの支配する水の世界、シュルガン湖を連想させる。

ではここで、シュリクン伝承の一例として、サハの「シュリクンの国への訪問」のあらすじをあげよう。

ずっと昔のある冬のこと、日が沈み、シュリクンが地上に出てくるころ、年取った産婆の前に櫓に乗った背の低い男が現れ、彼女をある家に連れ去った。「あんたが腕のいい産婆と聞いて連れてきた。女房が難産なのだ。お産が終わったら戻してやる」と言った。出産は無事に済み、七日間もてなされた。「私たちはシュリクンという水の精だ。今日、あなたの国へお送りし、お礼にお金をあげよう」。だが、産婆はシュリクンの妻の助言に従い、お金ではなく、ゴミを求めた。シュリクンは「上の世界にもっていくとこれはお金になるが、七日で使い切らなくてはならない」とゴミを与えた。すぐに元いたところに戻った。ゴミはお金になり、七日間で使おうとしたが余ってしまい、それらはゴミになってしまった。数年して、近所で婚礼があった。客人にあの男がいた。老婆が男に話しかけると、「どっちの目で私を見た？」と聞かれた。「左目」と答えると、男は指に唾をつけ、老婆の左目を押さえた。老婆の左目は見えなくなってしまった。⁽⁷⁵⁾

これは水中と地上という世界を行き来した産婆の話である。「シュリクンにおける「水

中]と「地上」という自然空間はそれぞれ「あの世」と「この世」という観念的空間に置き換えて理解できる」⁽⁷⁶⁾ならば、この産婆は多くの英雄物語の主人公が異世界を訪ねるような、シャマン的な行為をしたといえるかもしれない。産婆が出産を手助けするというのはまさに「生と死」に関わる行為である。サハのシュリクンはお金を数え切れないほどもち、たいへん裕福であるという⁽⁷⁷⁾。産婆の援助にたいして相応の礼をし、「異界」からこの世界に無事に戻すが、最後に失明させるという損害を与える。産婆が出産を助けるというモチーフも、水辺の異形が「生と死」に関わる存在であることを暗に示しているようである。サハに伝わる別の伝承もみてみよう。

夕方にシュリュキェンが地上に出てからは、水を汲んではならない。あるとき、庭で女の泣き声が聞こえた。見てみると、赤ら顔で眉毛のない女が、子どもを返しておくれと頼みながら悲しく号泣していた。夕方汲んだ桶の水の中に何か赤いものがあったので、それを女に渡した。そのため、暗くなってから水を汲むことは禁じられた。⁽⁷⁸⁾

シュリクンの子どもが桶の中に入る大きさであることは、先に見た「蛭」や「水辺の小さな精霊たち」とイメージ的に符合する。シュリクンが年中行事的な存在であるのにたいし、『ウラル・パトゥル』のシュルガンはそのような要素に欠け、またシュリクンが小さなイメージであるのにたいし、シュルガンは必ずしもそのようなイメージがないといった相違点はあるが、これらが、中央ユーラシアにおける言語的・「民族的」な枠組みを超えて共有する神話的形象であることは確かである。

おわりに

本稿では、まず、ユーラシア中央部の広範な地域において、川や湖など「水の世界」に棲む魔物・異形にまつわる伝承があり、その「水の世界」が人間の世界とは異なる「異界」、もしくは「境界」を意味することが示された。そして、スー・アナスやジャルマウズ、アルバストゥといった水辺の存在には、女性性や母性の特徴がみられることもわかった。スー・アナスの金の櫛は、この魔女の女性性を強調するとともに、呪術的な意味をもつ毛髪に関わるアイテムであることを象徴していることが考えられる。

母性に関連して、ジャルマウズやアルバストゥには出産など人間の生にまつわる要素が強いことも改めて確認される。これらが本来は生命にまつわる母神的存在であったという仮説も重視すべきであろう。彼らは、人間を苦しめ、命を奪う存在でありながら、反対に人間に善や利をもたらす存在でもある。水が生き物を生かしても殺しもするという両義的存在であることと同様に、ジャルマウズやアルバストゥも生と死、双方をもたらす両義性をもつのである。ジャルマウズとアルバストゥは形状や役割からみると、ロシアのパーバ・ヤガーと類似することも確認できた。これらは、名称は異なるものの同類とみなすことが

でき、ユーラシアを代表する超自然的存在といえるだろう。

また、シュルガンとシュリクンも水に関わるという点やその名称の類似性から両者の間には深いつながりがあることが推定される。中央ユーラシアに伝わる吸血鬼ウブル⁽⁷⁹⁾と同様に、シュリクンは言語系統や「民族」を越えて、この地域に根付いてきたのである。ユーラシア中央部のテュルクとスラヴには、言語や「民族」の枠組みを超えた文化的共生があった⁽⁸⁰⁾。こうした枠組みを超えた、ユーラシアの超自然的存在を巡る議論の可能性はさらに広がる。

【資料 A】 スー・アナス（水の母）⁽⁸¹⁾

1

夏の日の暑い中、ぼくは川に入る、潜る。
しぶきを上げる、楽しむ、泳ぐ、頭を水で滴らせる。
そうやって、一時間半ほど遊んでいた。
あれ、きっと、一時間も経ってないぞと気がついた。
川から逃げるように出て、すばやく服を身に着けて
何か怖くて、一人ぼっちで仲間もいなくて。
もう帰ろうと、川の足場に目を向けた。
足場には怖い女が座ってた。
太陽に光り輝く金の櫛で
座って髪を梳いているので
怖くて、息を止め歯を食いしばる。
岸辺の茂みに身を潜める。
髪を編もうとしていたけれど、女は水に飛びこんだ。
水の中に潜ったら、姿が見えなくなったんだ。
ぼくはゆっくり足場に行った。
そこには魔物の櫛があった。
近くに誰もいないとわかった。
櫛を奪って村に帰った。
前も後も見ないで走った。
走って暑くて汗だくになった。
ちょっと後を振り返える。
あ！ スー・アナスが追ってくる。
「待て！、止まれ！ それを私にお返しよ！」。
「なぜ盗む。それは私の金櫛よ！」。
逃げるとあいつは追いかける。追いかけるからぼくは逃げる。

無人の野原は沈黙している。
そんな風にして逃げて、ついにどうにか村に戻った。
スー・アナスが迫ってきたけど、犬が囲んで追い払った。
「ワン、ワン！」「バウ、バウ！」休まず吠える。
スー・アナスは脅えて逃げる。
怖くて震えてしまったけれど、もう大丈夫とぼくは言った。
それから悪いおばさんよ、櫛はここだとぼくは言った。
家に帰ると母さんに「金の櫛を拾ったよ」。
「泳いで疲れて、ずっと走ってきたんだよ」。
そう話したら母さんは、金の櫛を手を取った。
怪しがっていたけれど、何か思っただけだった。

2

いい気持ち。日も沈み、夜に寝ようと伏していた。
家中が夜の香りで満ちていた。
布団の中で、ぼくは眠りについている。
「出る！」「出る！」と、誰かが窓を叩いてる。
気持ちよく寝てたので、起きて見ようとしなかった。
この音に驚いて、寢床の母さんが起き上がった。
「どうしたの？ 誰？ 真夜中のこんな時間に誰なの？
なんてこと、こんな夜中にどうしたの！」。
「スー・アナスよ。金の櫛はどこなのよ？
返してよ！ あんたの息子が盗んだのよ！」。
月の光で、ぼくは下からそっと見る。
「どうしよう？ 神さま」とぼくは怖くて震えてる。
「出て来い！」「出て来い！」。休まず窓を打ち鳴らす。
髪からは泉の水を滴らす。
母さんは金の櫛を取り上げる。
外に向かって放り投げ、窓をぴしゃりとすばやく閉める。
スー・アナスからは逃げられた。
母さんからは、叱られ、叱られ、叱られた。
あんなこと、もうやらないと決めたんだ。
「精霊なんかもういやだ！」と何かを取るのはやめたんだ。

【資料B】 ジャルマウス・ケンピル（老婆ジャルマウス）⁽⁸²⁾

昔、あるバイ（富者）がいた。3人の息子がいた。バイは末っ子を愛していた。ある日、バイは馬を飲ませるため、湖のほとりに行った。バイが馬に水を飲ませていると、肺臓が流れてきて、馬のところで止まった。バイはその肺臓を押しつけたが、肺臓は元の場所に戻った。バイは再び肺臓を押しやったが、また元の場所に戻ってきた。バイは考えて、もう一度押しやった。今度は、その肺臓はジャルマウス・ケンピルに化けた。ジャルマウス・ケンピルはバイのひげをつかんで離さなかった。バイは、「放してくれ、おまえに私の家畜をやろう」と言った。ジャルマウスは「私にはおまえの末っ子以外には何もいないよ」と答えた。バイは「もしあんたが息子を連れ去ることができなければ、あんたにどうやって息子を与えることができるだろうか?」と言った。ジャルマウスはバイにこう教えた。「放牧するときにおまえの子の黄金のサカ（投石弓）を宿営地に残せ。私はそこに行く」。バイは「それならば、わかった」と言った。

バイは家に戻り、放牧を命じた。妻たちは天幕をラクダの背に載せ始めた。バイは息子の黄金のサカをその宿営地に置いてきた。ある場所に来ると、息子は父にこう言った。「父さん、僕の黄金のサカを見なかった?」。父は「さっきの営地にあるはずだ。取りに行ってこい」と答えた。息子が馬に乗り、元の営地に行くと、そこにジャルマウス・ケンピルがいた。息子は馬の上からこう言った。「ばあさんよ、ぼくの黄金のサカをとっておくれよ」。ジャルマウスは言った。「坊や、わたしは座っていて、立つことができない。立てば座ることができない」。息子はジャルマウス・ケンピルに、「ぼくは、馬から降りれば、乗ることができない。乗れば、降りることができないのですよ」と言った。これを3回繰り返すと、老婆も同じ言葉を3回繰り返した。そうしていると、息子は隙を見て、自分のサカをさっと取り上げて、逃げた。ジャルマウス・ケンピルはこれを追った。歯を一本引き抜き、それで斧を作り、馬の足を打ちつけた。次に、また歯を一本引き抜き、今度はそれで鋤を作って、馬の二本目の足を打った。すると馬は少年に言った。「私は二本足では駆けることができません。でも逃げる方法があります」と。それから少年は馬から降り、一本の木のとっぺんに登った。ジャルマウス・ケンピルは斧で、その木を切り始めた。すると一羽の雁が飛んでいたのので、少年は雁に言った。「雁よ、僕の犬の『白い耳』と『鋭い耳』に、ぼくをジャルマウスから救うように伝えておくれ」。雁は「あなたの犬にそのように伝えましょう」と答えた。『白い耳』と『鋭い耳』がすぐに走ってきて、ジャルマウス・ケンピルを殺した。こうして少年は犬たちと無事にアウルに戻った。

このケンピルは、人間の肉を食べていたのであった。そのため、ジャルマウス・ケンピルと呼ばれていたのである。彼女は人間の肉がいかにおいしいかを知っていたのであった。いつでも若者の肉が年上の肉よりもおいしいのだと知っており、年少の息子を追いかけたのである。

【資料C】 アルバストゥ (カザフ)

1 もしも女性が失神してしまったら、アルバストゥが苦しめているからだと考えられる。アルバストゥは、乳房を肩にかけ、髪の乱れた女性の姿をする。アルバストゥはオオタカやミミズクを恐れ、それらはアルバストゥを軽々しく連れ去るといわれる。それゆえ、失神者が出た家ではオオタカやミミズクが飼われる。アルバストゥはまたスルタンも恐れる。もしも近くにスルタンいれば、スルタンはアルバストゥを囮のユルタに招き入れる。革鞭をつかみ、そのユルタに急ぎ、遠くから邪悪なアルバストゥを鞭と脅し文句で脅かす。⁽⁸³⁾

2 アク・メチェトにヌルペイスというパイの妻が子どもを産んだ。そのとき、一匹の狐が伏せている妻のところに来た。そのころ、男たちがある家に集まっていた。その中の一人が、狐が入っていくのを見て、「あれはアルバストゥだ」と追いかけた。狐は、家から出てきて、妻の肺臓を川にさっと投げ捨てた。それから横になっていた妻は死んだ。⁽⁸⁴⁾

3 長く旅をしていた旅人が、ある集落のそばに近づいたときに、その村から口に肺臓をくわえている狐を見た。それが狐の姿に化けているアルバストゥであるのに気づいた。彼はアルバストゥが逃げ出すほどの神秘的な人物であった。彼はウラン (関の声) を叫んで突進し、そのアルバストゥを黄色く斑の鞭で打って、村に連れていった。村は大騒ぎになった。この村には分娩したばかりの女性がいて、弱って寝ていた。アルバストゥが彼女の肺臓を引き抜き、持ち去ったためである。先の男はアルバストゥを打ち、「肺臓をもとに戻せ！」と命じ、アルバストゥは肺臓をもとに戻した。これが功を成し、女性は魂を取り戻し、目を開き、生き返った。⁽⁸⁵⁾

4 シャマンがある家に泊まった。その家には病人の女性がいた。シャマンが眠りにつき、闇が夜を覆ったとき、アルバストゥがその家に入り、その病気の女性を窒息させた。客人のシャマンが床から起きて、アルバストゥを黄色の斑の鞭で打って、追い払った。そして最後に病気の女性は回復した。⁽⁸⁶⁾

【資料D】 アルバスル (クムク)

250年前、アジーと跛のパティーという二人の姉妹がいた。ある日、跛のパティーは、村から出て、草を集めに行った。雑草の中から、突然何か大きな人間のようものが現れた。パティーは飛び上がって、見てみると、それはアルバスルであった。彼女の胸は大きくて、大きくて、ひとつは前に垂れ下がり、もう一つは肩にかけていた。驚いたパティーはその場で固まってしまい、しびれて、地面につけられてしまった。アルバスルは言った。

「おい、パティー、地面に据えられても、大地は消えることはない。助かろうと思っても無駄だ。もしも生き続けたいのなら、いいか、私を見たことを誰にも言うんじゃないよ！」こういって、そのアルバスルは消えてしまった。

跛のパティーは、家に逃げ帰った。そしてアジーに見たことを話してしまった。アルバスルは、村に急いでやってきてパティーが話をするのを窓から見ていた。アルバスルが近づくと、アジーとパティーは扉を閉めた。アルバスルは、家の門を開けた。庭には3匹の犬がいた。アルバスルは犬を庭の隅に追いやり、敷地内を駆けずり回った。それから、扉をたたいた。

「おい、パティー！ おまえに言ったはずなのに、何をしたんだい!? 扉を閉めて、本当に助かると思っているのか！ 助かりゃしないよ！」

そして髪を振り乱し、家の周りを回り始めた。

それからほどなくして、パティーの夫が亡くなったという……

アジーとパティーの一族は今でもブグレンに住んでいる。彼らの中には、アジーという名の小さな女の子がいる。いにしえのアジーにちなんでそう名付けられたのである。⁽⁸⁷⁾

【資料E】アルバスル（ノガイ）

ある女性が隣の村の姉妹のもとへ招かれた。突然、彼女の馬が止まった。どれだけ馬をせかしてもそこから少しも動かなかった。馬車から降りて、見てみると、アルバスルが道をふさいで眠っていた。彼女が驚いて叫ぶと、アルバスルは目を覚ました。

アルバスルは立ち上がると、ゆっくり道のわきにあった半壊した家に入った。女性はさらに進んだ。隣村に到着し、起こったことをみな姉夫婦に話した。夜、家に戻るとき、義理の兄についてきてもらい、一緒にアルバスルを見てみようと考えた。

道中、アルバスルはいなかった。彼は廃屋に入った。見てみると、アルバスルが幼い自分の息子の髪を櫛ですいていた。そこでアルバスルを息子と一緒につかまえて、自分の家に連れ帰った。アルバスルが逃げないように、頭から髪の毛を何本か抜き、それをコーランにはさんだ。

あるとき、その夫婦は隣の村に招かれた。留守宅には、幼い娘とアルバスルが残った。アルバスルは家事をみなこなし、その娘とも遊ぶようになっていた。アルバスルは遊ぶときにいつもコーランをわたすように頼んだが、父に禁じられていたので、コーランをわたすことはなかった。そこでアルバスルは娘を脅した。「コーランをわたさなければ、おまえを火にくべてやる！」。娘は驚いて、アルバスルにコーランをわたした。アルバスルはコーランを開き、自分の髪の毛を抜き取った。アルバスルは、娘を火に放り投げると、息子を連れて、森に逃げていった。⁽⁸⁸⁾

—注

- (1) Юсупов Ф.Ю., *Себер татарлары 3*, Казан, 2017, 814.
- (2) Габдулла Тукай, *Су анасы*, Казан, 2009.
- (3) 「水の魔女」金田鬼一訳『完訳グリム童話2』岩波文庫、389-391 ページ。
- (4) 「呪的逃走」は、イタリアの「プレツェモリーナ」やギリシア神話のアタランテーの物語、テュフォンの穀物の母イシス（デメーテル）の追跡にも見出せる。
- (5) 高木昌史「三枚の御札／水の魔女」『成城文藝』224号、2013年、27ページ。
- (6) Мировиен М., *Демонологические рассказы киргизов*, С-Петербург, 1888, С.36-37; Жалмауызды алдаган кыздар, Алтын мүйізді киик, Алматы, 8-10. なお、「呪的逃走」とジャルマウズ伝承については、拙文「中央ユーラシアと日本の民話・伝承の比較研究のために」『和光大学表現学部紀要』16、52-54 ページも参照。
- (7) 高木昌史、38 ページ。
- (8) Пропп В.Я., *Исторические корни волшебной сказки*, Ленинград, 1986, 350.
- (9) Там же.
- (10) 高木昌史、38 ページ。
- (11) Пропп, 350.
- (12) 拙稿「ユーラシアの『甲賀三郎』」山本ひろ子編『諏訪学』国書刊行会、378-396 ページ。
- (13) «Йиртөшлек». *Татар халык иҗаты: Дастаннар*, Казан, 1984, 78.
- (14) *Казахский фольклор в собраниях Г.Н. Потанина*, Алма-Ата, 1972, 292.
- (15) Валянская О.П., *Женица в мифах и легендах :Энциклопедический словарь*, Ташкент, 2008, 111.
- (16) Сулайман Кайыпов, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тейитюк»*, 1990, Фрунзе, 188-189.
- (17) *Бабалар сөз 75: Батырлық ертегілер*, Астана, 2011, 368.
- (18) Сонда да.
- (19) Валянская, 111.
- (20) *Бабалар сөз 75*, 368.
- (21) Сонда да.
- (22) *Татар халык иҗаты: Дастаннар*, Казан, 1984, 78.
- (23) Валянская, 186.
- (24) *Казахский фольклор в собраниях Г.Н. Потанина*, 292.
- (25) 「バーバ・ヤガー」松村一男他編『神の文化史事典』白水社、397 ページ。
- (26) Пропп, 53.
- (27) Пропп, 75-76.
- (28) Там, 76.
- (29) Валянская, 111.
- (30) *Казахский фольклор в собраниях Г.Н. Потанина*, Алма-Ата, 1972, 292.
- (31) Там же.
- (32) 「バーバ・ヤガー」『神の文化史事典』、397 ページ。
- (33) Валянская, 18.
- (34) «Тенкри», Чокан Валиханов избранные произведения, Москва, 1986, 228.
- (35) Валянская, 17-19.
- (36) Celal Beydili, *Türk mitolojisi ansiklopedik sözlük*, 2005, Anlara, 40.
- (37) これは叙事詩『エディゲ』に登場する、鳥の足跡を残すべりの姿とも重なる。拙稿「「草原の英雄」を生んだ両親は誰か？」小長谷有紀編『「大きなかぶ」はなぜ抜けた？』講談社現代新書、111 ページ。
- (38) Валянская, 17-19.; Байжигитов, Калыбек, Кыргыз мифтери, уламыштары жана легендары, Фрунзе, 1985, 141.
- (39) Абрамзон, *Киргизы*, Фрунзе, 1990, 295.

- (40) Celal Beydili, 40.
- (41) 「山羊女アルムイス」齋藤君子『シベリア 神話の旅』三弥井書店、204-205 ページ。
- (42) Валянская, 18.
- (43) «Алвасти», *Ўзбек халқ эртақлари Сирли туи*, Тошкент, 1990, 106-107.
- (44) Celal Beydili, 40.
- (45) 「アバーシ」『神の文化史事典』、47 ページ。
- (46) *Якутские мифы = Саха өс-номохторо*, Новосибирск, 2004, 329.
- (47) Валянская, 18.
- (48) Там же.
- (49) Аджиев, А.М., *Устное народное творчество кумыков*, 2005, Махачкала, 278.
- (50) Валянская, 18. 毛髪でアルバストゥを操るのは、フレイザーのいう「呪術的共感関係」の好例である。J.G.フレイザー著、吉川信訳『初版 金枝篇』上、ちくま学芸文庫、31 ページ。
- (51) エリアーデ『シャーマニズム下』ちくま学芸文庫、285-286 ページ。
- (52) *Шапарова Н.Краткая энциклопедия славянской мифологии*, Москва, 2001, 23.
- (53) *Русский демонологический словарь*, 1995, СПб, 352-354. Шапарова, 24.
- (54) Пропп, 75. 日本の山姥伝承でも、山姥は異常に大きな乳房をもつことが強調され、山姥に神話のイザナミなどと共通するような、偉大な母神としての性質を見出すことが指摘される。吉田敦彦『妖怪と美女の神話学』名著刊行会、111-113 ページ。
- (55) Валянская, 19.; Celal Beydili, 40.
- (56) 竹原新「イランのこぶとりじいさんとその背景」井本英一編『東西交渉とイラン文化』勉誠出版、2010年。竹原新「イランの怪談」『説話・伝承学』25号、2017年、42 ページ。なお現在、イランの民間信仰では、アールとジンが混同して使われる。
- (57) Валянская, 18-19.
- (58) Там, 19.; Celal Beydili, 40.
- (59) Там же.; Кондыбай, Серікбол, *Школьный словарь казахской мифологии*, 2013, 14.
- (60) Там же.; Сонда да.
- (61) 拙訳『ウラル・バトウル』平凡社 東洋文庫、132 ページ。
- (62) 死をもたらずシュルガン湖と反対に、老狩人が湖に入って、若い女性や馬などに変身する、北カフカースのクムクの伝承「湖に入って乙女になった狩人」では若返りや変身をもたらず湖が示される。
- (63) ロシアの水に関わる超自然的存在にヴォジャノイやルサールカなどもある。ヴォジャノイとシュリクンとの違いは「水中」は水の主ヴォジャノイにとっては生の世界であるが、シュリクンにとっては生は無い」ことである。塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」『スラヴ研究』49、2002年、217 ページ。
- (64) Шуликуны, *Энциклопедия мифология*, Москва, 2003, 626.
- (65) 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」216-217 ページ。
- (66) *Якутские мифы = Саха өс-номохторо*, Новосибирск, 2004, 328.
- (67) 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」233 ページ。
- (68) 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」214 ページ。
- (69) Шуликуны, *Энциклопедия мифология*, 626.
- (70) 塚崎今日子「北ロシアのフォークロア」宇山智彦編『講座スラヴ・ユーラシア学 2』講談社、2008年、156 ページ。
- (71) 同上、157 ページ。
- (72) 拙訳『ウラル・バトウル』272 ページ。 *Баикиры*, Москва, 2003, 565.
- (73) 塚崎今日子「北ロシアのフォークロア」169 ページ。なお、フィン・ウゴル系からは同形異称のクーリ系の名称を受け継いだと考えられる。
- (74) 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」217 ページ。
- (75) *Якутские мифы*, 326-327.

- (76) 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能」241 ページ。
- (77) *Якутские мифы*, 328.
- (78) Там, 327-328.
- (79) 「ヴァンパイア」の原型と推測されるウブルは、テュルクやスラヴの魔物である。この異形も言語や「民族」を越えて広く共有されるが、これについてはまた稿を改めたい。「ウブル」『神の文化史事典』119 ページ。
- (80) 本稿では具体的に掘り下げなかったが、テュルクやスラヴにフィン・ウゴル、トゥングースも加えるべきであろう。ユーラシアの広範な地域に彼らの文化的共生を見ることができるのである。
- (81) Габдулла Тукай, *Су анасы*, Казан, 2009.
- (82) Мирошиев М., *Демонологические рассказы киргизов*, С-Петербург, 1888, С.32-39
- (83) *Қазақтың мифтік әңгімелері*, Алматы, 2001, 206.
- (84) Сонда да. アク・メチェトは現在のカザフスタン、クズルオルダ。
- (85) Сонда да。
- (86) Сонда да。
- (87) *Құмықский фольклор*, Тбилиси, 1999, 128
- (88) Ялбулганов А.А., *Ногайцы*, С-Петербург, 2010, 80-81.